新田次郎全集

第十七巻

新田次郎全集 17

武田信玄(三)

新潮社版

武田信玄（三）
新田次郎全集第十七巻
昭和四十九年十二月二十五日発行
昭和五十三年九月十日七刷
定価一一〇〇円
著者　新田次郎
発行者　佐藤亮一
発行所　新潮社
東京都新宿区矢来町七一〒162　振替東京四-八〇八
電話　業務部03(266)五一一一　編集部(266)五四一一
印刷　株式会社金羊社
製本　神田　加藤製本

© Jiro Nitta, 1974, Printed in Japan.
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

火の巻（承前）　5
山の巻　71
解題　374

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

武田信玄
(三)

火の巻（承前）

小田原の土

「府中（駿河府中）より、小田原の方がいくらか涼しいかしら」

阿弥御寮人は、女中頭のかつに言った。

「さようでございます。確かに御当地の方が暮しやすうございます」

かつは、涼しいとは答えずに、暮しやすいと答えたのである。昨年の暮、武田信玄が駿河に馬を入れて以来の変転はあまりにも急であった。今川氏真は名実ともに駿河、遠江の二国を失い、いまは、正室阿弥御寮人の岳父、北条氏康にかくまわれている運命になっていた。だが、阿弥にとっては、夫の氏真が領主としての地位に居ても居なくともどうでもよかった。彼女は、大勢の腰元たちにかしずかれて、ちやほやされているよりも、その日その日を静かに暮すことができればそれでよかった。武田信玄の侵略のとき、はだしで城を逃げ出したときのことを思うと、どこでもいいから平和なその日が送れるところに居たかった。小田原城は彼女の生れたところであった。なにもかも懐かしいものばかりであり、ここに居たらもう安心だという気持が、阿弥に、その夏を涼しく感じさせたのである。

明け放された彼女の部屋からは、小田原の町並をへだてて海が見えた。涼しい風は海から吹いて来た。

「申し上げます」

海から吹いて来る風に乗って来たように、そっと近づいて来て、廊下の端に手をつかえた女があった。女中頭のかつが用件を聞いた。

「ただいま御門を通じて、御方様に書面が届けられました」

女は漆塗りの文箱をかつに渡して去った。

「おやこれは武田菱の文箱、もしやまた……」

かつは眉をひそめた。武田は嫌いだった。武田信玄の駿河侵入以来、武田を連想するものを見ただけで、胸くそが悪くなる。

もしやまた、とかつがその文箱から想像したのは、あかねのことであった。武田信玄の影のように現われるあかねが、またなにかを知らせに来たのではないだろうか。あかねが出現したあとには必ず血生ぐさい風が吹く。かつは、つい先だって、三島から山を越えて、この小田原まで逃げ

て来たときのことを思い出した。武田勢が撃ちかけて来る弾丸が頭上を飛び越えていく。あの無気味な音は、忘れようと思っても忘れることはできなかった。かつはその文筥の紐を解いて阿弥御寮人の前に置くと、心もち膝を進めて、阿弥の手元を見つめた。阿弥はかつの眼と文筥とを見較べながら、筥の覆を開けた。香でもたきこんであるのか、いい匂いがただよい出た。手紙は、彼女たちが想像していたとおり、あかねからのものであった。

（至急お知らせしたいことがございますので、当地まで参上いたしました。御寮人様の御生命にもかかわることゆえ、ぜひともお会いした上、そのことをお話し申し上げたいと存じます。私は、小田原城下の旅籠伊勢屋半左衛門宅に鶴首しております）

「また来たわね」

と阿弥は言った。有難いような有難くないようなお客様であったが、会わねばならない客であった。

「お館様に相談なさったら如何でしょうか」

かつは常識的なことを言った。かつに言われなくとも、城外から人を城内に入れるには、父氏康か兄氏政の許可を得なければ出来ないことであった。しかも相手のあかねは、武田信玄の側室である。

阿弥はかつを通じて、氏康にすぐにも会いたい旨を通じた。

氏康はそのころなんとなく健康が勝れなかった。氏政に家督を譲って、楽隠居の身でいたいと思っていたのに、武田信玄の駿河侵略という新しい事態が発生して、無理矢理に動乱の場に立たされることになった。

「阿弥が会いたいというのか、そうか、そうか、直ぐ行くと申し伝えて置け」

そのとき氏康は、氏政ほか数人の家臣を交えて、駿河方面の防衛策を論じていた。大宮城を手に入れて、攻撃路をかためた信玄は近いうち必ず駿河に進攻するだろう。それをどうして防ぐかという作戦会議なのだが、相変らずの、その場限りの防衛策が出るだけで、思わず膝を叩いて、それだっ、それにしようというような名案を出す部将はいなかった。氏康はいらいらしていた。

（どれもこれも俗物ばかりだ。これでは北条の将来が思いやられるわい）

氏康はこのごろ、しきりにそれを思っていた。跡継ぎの氏政は、戦争の方はまあまあだが、調略の方はさっぱり駄目だ。先が読めないのである。ものごとを単純に考えすぎる。そこに起ったことだけに腹を立て、喜び、そして、すぐ馬に乗りたがる。

「父上、軍議中でございます、阿弥のことなど、あとにな

されたらいかがでしょうか」
「いや、軍議はお前たちだけで続ければよい、どうせ、これ以上のうまい案は浮ばぬだろう。石頭には、石頭の案しか出ない、せいぜい出たところで、石地蔵の頭の苔ぐらいのものだ」
氏康は、そう言って席を立った。
氏康の顔にはそばかすが多かった。年を取ると、そのそばかすを中心として顔のしみが多くなった。氏康の子供たちには、誰にもそばかすはなかったが、どうしたわけか阿弥だけには、父の氏康のそばかすが、そっくりそのまま遺伝したようにできていて、大きなそばかすのひとつひとつ拾い上げると、その場所まで似ていた。
「この子は、よう、おれに似ている」
氏康は、阿弥を子供のころから特に可愛がっていた。その阿弥を、今川氏真に嫁にやるときも、
「あんな男に阿弥をやれるか」
と反対したものである。そのころ既に氏真が、平均点以下の人間だということがわかっていたのである。しかし、大勢は、阿弥を氏真にやらざるを得なくなり、あんな男にと氏康が言ったとおり、氏真は駿河から追い出される運命になった。氏康は、阿弥が可哀そうでならなかった。氏真などに嫁にやらねば、余計な苦労もしないですむし、きっといまごろは、阿弥によく似て、やはりそばかすの多い孫を幾人か生んでいただろうにと思った。
「阿弥、いそぎの用というのはなにかな」
氏康のさきほどまでのきびしい顔がなくなり、にこにこしながら言った。お前の言うことなら、なんでも聞いてやろうぞというふうな、娘に甘い老人の顔になっていた。
「お父上、またあかね様が参ったのでございます。どうしたらいいのか御相談に参りました」
阿弥はそう言って、かつに持たせて来た文筥をそのまま氏康の前に置いた。氏康の眼が光った。阿弥がなにか甘えに来たのだろうと思っていたのがそうではなくて、どうやら背後に、含みがありそうな話だから氏康は、坐り直して、文筥の中の手紙を取った。身体をゆすぶったとき、氏康の鬢の白いほつれ髪が、阿弥の眼に止った。なにか父が急に年を取ったような気がした。この父とも、そう長く一緒に暮すことはできないのではないかと思った。阿弥は、ふと、もの悲しくなり顔を伏せた。
氏康はその阿弥を横眼で見ていた。小田原城に来ても尚、戦のことを心配しなければならない阿弥が、気の毒でならなかった。
「会いたいというのだから、会ったらいいだろう、しかし、相手は忍びの術を心得ている女ゆえ油断はならない。お前

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

を伊勢屋半左衛門宅にやるわけにはいかないし、あかね殿をこの城内へ入れるのもどうだろうかな」

氏康があかねに殿をつけたのは、あかねが信玄の側室の一人であったからである。

氏康は、しばらく考えてから、

「やはり、正式に迎えをやって、あかね殿を城内へ呼び入れて、お前と会わせてやろう。警戒は充分にするから心配はいらぬ」

「お父上、あかね殿は私の命の恩人です。私の命を守ることを考えこそすれ、私に危害を加えることはございませぬ、必要以上の警戒などすればかえって、北条家が笑われます。私がお父上に相談に参ったのは、会ったほうがいいかどうかということ、それだけでございます」

阿弥ははっきりと言った。

「会ったほうがいい。あかね殿が、お前に会いたいということは、信玄殿が、あかね殿の口を通してこの氏康になにごとかを言いたいのであろう。いわば、あかね殿は、武田方の非公式の使者と見るべきであろう。しかし、あかね殿はたいした度胸だな、どうしてこの小田原に潜入して来たのだろう」

戦が始まってから、人の出入りに厳重な眼が光るようになった。女一人で、どうして関所を越えて来たのだろうか。氏康は一度、あかねに会って見たいのだが、ここのところは飽くまでも阿弥を通したほうがいいと思って止めた。

その翌日、あかねのところには、阿弥の女中頭かつが迎えの使者としておもむいた。朱塗りの女用の駕籠が用意されていた。警護の武士三十人あまりが、駕籠を取囲んで、小田原城に入った。

「御寮人様しばらくでございました。あれ以来なにごともなく、おすこやかな御顔を拝し、うれしゅう存じます」

とあかねは挨拶した。あれ以来なにごともなく、という短い言葉の中には、伊豆戸倉の居館から脱出のときの狼狽ぶりを、ちょっぴり皮肉っているようでもあった。

「あかね殿、あの節はいろいろと御忠告いただいたのに」

阿弥は言葉につまったが、あかねはすぐ阿弥の言葉を引き取って、

「御寮人様の思うようにならぬ時世だからいたし方のないことでございます。今日私が参って、これから申し上げることも、またまた、御寮人様の意に添わない結果になるかもしれませんが、一応は申し入れておきまする」

あかねは、阿弥の顔を直視して言った。

「なんのお話でしょうか、この城を出て、どこぞへ逃げよというお話でしたら、私はもう落ちて行くべきところはございません」

阿弥はあかねの視線を受止めて言った。
「さすがは北条氏康様の御息女、お推察のいいのには感じ入りました。実は秋の取り入れが終るころ、武田の大軍がこの小田原城を囲みます。そして、この城は必ず落ちます。口先だけではなく、その準備はちゃんとできています。落城のとき、女はどうなるか、御寮人様は充分、御心得があると存じます」
あかねはすらすらと言った。
「この小田原城が落城するのですか、長尾景虎殿さえ、どうすることもできなかったこの城が、いくら武田の軍が強いといってもそう簡単に落ちるでしょうか」
阿弥は冷笑を浮べて言った。
「では、武田の軍勢が、どうやって、この城を落すか、その証拠をお見せいたしましょうか」
あかねは、たもとの中から、三つの紙包みを出して、阿弥の前に拡げた。中には、それぞれ、砂まじりの土が入っていた。
あかねは、更にたもとから小さく畳んであった絵図を出した。小田原城及びその近傍の絵図面だった。
「御寮人様、ごらん遊ばせ、武田軍は、この絵図に、甲、乙、丙と示されてある、三つの場所から、お城の下に向って坑道を掘り進め、お城の下に多量の爆薬を仕かけ、火を点じ、お城を一挙に覆滅いたします。武田軍が、松山城攻めに、坑道を掘り進めて、城を落したことを御寮人様も御存知だと思います。坑道を掘ることができるかどうかは、その城の地下の土の質によってきまります。この三つの紙包みの中の土は、甲、乙、丙の場所をひそかに掘って得た土でございます」
阿弥は顔色を変えた。彼女が坐っている、その畳の下からなに者かが突然現われ出て来そうな気味の悪さであった。
「で、あかね殿は私にどうしろと、おっしゃるのでしょうか」
あかねは、その言葉を丁重に受取ると、一段と声を強めて言った。
「どうぞ、甲斐の国へお越しを願いとう存じます。もし、今川氏真様と御寮人様が甲斐にお越しになられるならば、お館様は喜んでお迎えすると言っておられます。いまの日本で安心して住んでおられるところは甲斐の他にはございません」
あかねはいっこうに臆する様子もなく、阿弥の顔が、怒りで赤くなっていくのを見ても、知らんふりをして、まことに、奇妙な勧誘を続けるのであった。
氏政は初めっから怒っていた。氏政ばかりでなく、その

席にいる重臣たちの多くは、あかねの言葉を非礼きわまるものであると怒っていた。

「こうなったら、こちらから先に甲斐へ攻めこんだらどうであろうか、防ぐことにばかり気を配っているから、信玄をいよいよ、つけ上らせることになる」

氏政が言った。それは感情論であって、関東を完全に制圧していない北条にとってはできない相談であった。氏政の発言に賛成する者は少なかった。

「武田殿は、そちたちの議論をあらかじめ予想して、このようなことを言って来たのであろう。おそらく武田殿はいまごろ、大声をあげて笑っておられるだろう」

氏康は武田殿と言った。信玄は今は敵ではあるが、長い間もっとも信頼すべき味方の、武田殿と呼んでいた相手を急に呼び捨てにするわけには行かなかった。

「では父上の意見を伺いましょう、信玄は、側室あかねを使者としてなぜこのようなことを言って参ったのでしょうか」

氏政が言った。

「わからないのか、いやわかりにくいだろう、わからないときには、まず幾つかの疑問点をあげて、その一つ一つを消して行けば、最後に残るものが真実に近いものになる」

氏康はそう言うと、祐筆に向って、顎をしゃくった。これから言うことを書き留めよという合図であった。

一、あかねの言は、単にいやがらせないし牽制に過ぎないこと

二、小田原城を攻めるように見せかけて、実は大軍を駿府に投入する下心があってのこと

三、小田原城を攻める前提としての威嚇宣言であり、これによって、北条の動きをたしかめるためであること

氏康は、その三項目について議論を尽して見るように言った。

第二項の、駿河再侵入のための謀略という見方がもっとも多かった。氏政はそれ以外のことは考えられないと極言した。

「そうかな」

氏康は腕を組んだまま言った。

「余は、第三項こそ、武田殿の真意ではないかと思うが」

「もし、武田勢が小田原城を囲むということになれば、当方としては、願ったりかなったりのこと、敵軍を城に引きつけて置いて関東周辺をかため、敵の退路を断ち、矢弾、糧食の尽きたるころを見計らって攻めかけ、皆殺しにするだけのことです」

そういう氏政を氏康は、哀れむような眼で見ていた。武田信玄ともあろうものが、いま氏政の言っているような手

に簡単にかかる筈はない。武田信玄が、この小田原城を囲むには勝算あっての上でないとやらないことである。その勝算はなんであろうか。

「申し上げます」

と進み出た者があった。家老の松田憲秀であった。

「いままでの武田殿の戦を拝見しますと、石橋を叩いて渡るような、まことに手固い戦ぶりでございました。まず属城の一つ一つを丁寧に落してから主城を攻めるというやり方でした。その手口から見ますと、小田原城を攻める前に、まず関東の諸城を攻めることは必定、小田原城を守るためには、武蔵鉢形城、武蔵滝山城の二城の固めを厳重にすることが肝要と存じます」

松田憲秀の言うことはまことに当を得たものであった。

「そのとおりだ。従来の武田殿ならばそのとおりにするだろう、しかし、このごろの武田殿のなされ方はちと違う」

氏康は言った。

「と申されますと……」

松田憲秀が怪訝な顔をすると、その松田憲秀に言い含めるように言った。

「武田殿の戦ぶりは、去年の冬、駿河に攻めこんだその時からして既に従来の信玄流の兵法ではなくなっていた。電光石火の勢いで駿府城を落した武田殿のやり方は従来の武田殿を知っている者には理解されないことである」

「戦法が根本的に変ったと申されるのですか」

松田憲秀が言った。

「戦法が変ったというよりも、武田殿の考え方そのものが変ったと見るべきだろう。いまや、武田殿はたいへんな自信を持って戦をやっている。総大将の自信が一兵卒にまで行きわたったときは恐ろしい力を発揮するものだ」

氏康が言った。

氏康の侍臣が入って来て、氏康になにごとかを告げた。

「丹沢与衛門が参ったか、すぐここへ通せ」

丹沢与衛門という名を聞くと、そこに居並ぶ北条の重臣たちの顔色が動いた。丹沢与衛門は使番衆の中でも特に、氏康に眼をかけられている者であった。氏康が丹沢与衛門を使うときは、重要なことがらに限っていた。

「あかね殿は、阿弥に絵図を示し、甲、乙、丙三カ所の印があるところから土を取ったと申したそうである。その事実があったかどうかを、丹沢与衛門に調べさせたのだ」

氏康は丹沢与衛門を呼んだわけを説明した。あかねと阿弥が面会したのが午前中で、午後になって、直ぐ緊急軍議が開かれたのである。氏康は、阿弥から、あかねとの話し合いの結果を聞くと、直ぐ丹沢与衛門に、坑道調査の有無を調べさせたのである。

「与衛門、調べて来た結果をそのまま申すがよい」
氏康に言われると、与衛門は、直ぐ用意して来た絵図面を前に置いて話し出した。
あかねが持っていた絵図面にあった甲、乙、丙の三カ所については、阿弥だけしかその絵図面を見た者はなかったから詳しくはわからなかったが、大体の見当はついた。与衛門は部下数名を三カ所に出して、その辺をしらみつぶしに調べて廻った。その結果、ここ数カ月、人の出入りがない空屋が見つかった。空屋の前の持主に訊くと、
「この家は今年の正月ころ、お上がひそかにお買い上げになったものゆえ、そのむきへお訊ね下さい」
ということであった。その係りの役人は誰かと訊くと、家老、松田憲秀の家臣、望月市兵衛ということがわかった。早速、望月市兵衛に問い合せると、狐につままれたような顔をしているから、念のために、望月市兵衛を伴って、その家の旧家主に会わせると、このお方ではないということであった。
丹沢与衛門は、すぐその空屋の雨戸をこじ開けて中へ入って見ると、中には土がいっぱいつまっていた。その家の床下から、城の方角に向って、坑道が三間ばかり掘り進めてあった。
「家主たち三人が申すには、望月市兵衛だと名乗った武士は立派な身なりをしており、この家をお上がお買上げになったことは、他人に洩らしてはならぬ、もし他人に洩らしたら打首になるかもしれないと申し置いて去ったそうでございます」
丹沢与衛門は、甲、乙、丙三カ所の空屋の中から取って来た土の入った紙包みをそこに拡げた。その土と、あかねが阿弥のところに置いて行った土を比較して見ると、まったく、同質なものであった。
「北条家の家臣の名をいつわり、城下に穴を掘るとは、ふらちきわまる大悪党……」
松田憲秀が声を慄わせて怒ったが、いまさらどうしようもないことだった。問題は、小田原城下に、武田側が人を入れて、試掘をしたという事実であった。北条方の度肝を抜くには充分な離れ業であった。重臣たちは色を失った。
「これはまさしく、武田方のおどかしだ。それ以外のなにものでもない。城下に土竜道を掘って、この小田原城を落すというなら、落して貰おう。土竜道が城の底に届くには、どんなに急いでも、一年はかかる。武田の大軍が、一年間もこの城を囲んでおられるとは考えられない。それこそ、留守中に、信濃と甲斐は上杉に取られてしまうだろう」
氏政が強がりを言ったが、この席では、なにか、よそごとを言っているようにさえ聞えた。

「とにかく、まず城下の守りを厳重にしなければならない、このぶんだと、武田の間者が、どれだけたくさん入りこんでいるか、想像もつかない、困ったことだ」
氏康が言った。困ったことだというのは、氏政の政策批判にも通じた。氏政は嫌な顔をした。
「ところで父上、阿弥の返事を待っているあかねの処置はいかが致しましょうか」
氏政が言った。
「あかね殿は、非公式ではあるけれど、武田殿の使者であることには間違いない、国境まで丁重に送り返すしかないであろう」
しかし氏政は、氏康の考え方には不満のようであった。
「非公式の使者には責任は持てないな」
氏政はひとりごとを言った。彼の周囲の二、三人にしかわからない小さな声であったが、氏康には、氏政の口の動かしようから、氏政の言葉の内容が読めた。
「愚かな真似をするでないぞ、戦国の世は複雑だ。裏と表がぐるぐる変る」
いまは、武田は敵であるが、何時また友好国になるかもわからない。そのことを裏と表がぐるぐる変ると氏康は言ったのだが、氏政はそれを飲みこむことができなかった。氏政はあかねが憎らしかった。妹の阿弥にしつっこくつきまとって来るあかねという女の出しゃばり方もさることながら、彼女を使っている信玄の得意然とした顔を思い出すと、悪寒が全身に走った。
氏康が席を立った。氏政が続いて席を立った。その日の軍議はなんの結論も得られなかった。丹沢与衛門の報告は重臣たちに大きな衝撃を与えた。城下に敵の一味が坑道を掘りかけたということは重大事であった。これほどの大事を見逃していた責任は誰が負うべきであろうか。家臣たちはすぐそれを考えた。よくよく考えて見ると、この事件は、そこにいる重臣のどの一人をとっても、少しずつは関係がありそうだった。彼等は会議どころではなかった。重臣たちの心の乱れを見て、氏康は席を立った。武田に対する応戦策の軍議は日を改めてすべきだと思ったのである。
氏政は席を立ったとき、あかねに対する処置を心に決めていた。
(信玄め、どこまでひとをばかにする気だ。父がなんと言おうと、この氏政は、いつまでもばか者扱いにはされぬぞ)
氏政はあかねを生かして帰すべきではないと思った。あかねは正式の使者ではない。あかねの個人的な考えで阿弥のところにやって来たのだから、生命の保証を与えることはないのだ。もともとあかねは不法入国をしているのだか

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo